

巻頭言

新生JAわかやま発足

和歌山県農業協同組合中央会 代表理事会長

坂東 紀好



我が国の食料・農業・農村を取り巻く環境は、食料自給率の低迷に加え、農家の高齢化や担い手の減少による生産基盤の縮小、頻発する自然災害や国際紛争の長期化等に伴う生産資材価格の高騰など、多くの課題が山積しています。

また、デジタル化の急速な進展、SDGsやカーボンニュートラルに向けた取り組み等を背景に、社会のあり方や暮らし、価値観が変容するなど、時代は大きな転換点を迎えるようとしています。

こうしたなか、4月に県内8JAが合併し和歌山県農業協同組合（JAわかやま）が発足いたしました。

新生JAわかやまでは、農業を基軸に地域に根ざした協同組合として、「魅力ある力強い



選果場を視察する坂東会長

農業の実現」「果樹・園芸産地の堅持」「地域の活性化への貢献」「地域に根ざしたJA運営」「盤石な経営基盤の確立」を基本方向

として、持続可能な農業と地域共生社会の実現を目指し、役職員が一丸となって日々事業・運営に邁進しているところであります。

折角の機会ですので、新生JAわかやまの取組みについて、2点お話しをさせていただきます。

1点目は、価値を高めた農産物「和歌山ブランド」で産地力を押し上げていくことです。

JAわかやまでは、品種改良や栽培方法などにこだわり価値を高めた農産物「和歌山ブランド」の生産拡大に取り組んでいきます

また、品質の高い農産物づくりを目指した細やかな営農指導により、ブランド力の押し上げを図っていきます。

当県は、ミカンや梅、柿などの果樹や、ウスイエンドウに新ショウガといった野菜、スターチスをはじめとする花きなど多種多様な品目を栽培しています。このうち、ミカンや梅、柿、ウスイエンドウなどの生産量は全国一を誇ります。

先人たちが磨き上げた技術と地域の農家の強い絆により長く育んできた従来品種のうち、例えば、糖度基準で選別した「味一みかん」や樹上で渋を抜いた「紀の川柿」などのプレミアムな商品や、山土や水田土壌ではなく砂地で栽培する「新ショウガ」といった地域特産品の生産拡大にも一体となって取り組んでいます。厳しい栽培基準を設けて、糖度や食

味にこだわったミニトマト「赤糖房（あかとんぼ）」も価値を高めて市場や消費者にアピールしています。

これは単なるブランドづくりではありません。品目の一部でブランド化を図る、すなわち価値を高める取り組みこそが、その品目全体の栽培技術の引き上げにつながるのです。栽培技術を高めていくには、農家とJAが互いに意見を交換し、目標に向かっていかなければなりません。相互信頼と理解があってこそ確実なモノづくりが実現すると考えます。

合併に向け、組合員農家にアンケートを通じて要望を尋ねたところ、特に多かったのは営農指導体制への期待でした。営農指導員には品目別の他、地域を横断して指導できる広域で対応可能な人材が求められています。

合併は、産地づくりを継続していく再スタートの機会と位置づけております。組合員農家に「合併してよかった」と実感してもらえるように、熱意と情熱ある農家を支え、活躍してもらう応援体制を目指します。

もう1点は、「国消国産」運動の継続であります。

消費者の理解なくして農業の成長はありません。お互いの理解や信頼なくして農業は成り立ちません。農業振興だけに力を入れていれば生き残れる訳ではないので、女性会や青年部、生産部会などJAグループならではの組織活動を活かして「国消国産」の運動を広げていくことが大事であります。

振り返ると、農畜産物の価格が上がっていると報道などで伝えられました。インタビューを受けた消費者やスーパーマーケットなどの量販店の店長らが「食品の価格が高くなった」と口をそろえて話す姿を見ました。

生産現場の実態や品目の価値への理解を深めたうえでの発言なのでしょう。今、米の価格が高いと言われているようですが、これまでの生産費

もまかなえないような米価と比較した発言にとどまっていると思います。なぜ価格が上がったのか、価格は果たして本当に高い水準なのか、ということ立ち止まって考えてもらうためにも現場の状況を十分に理解してもらわなければなりません。

現場の農家の多くは「消費者にいい農産物を食べてほしい」「いいモノづくりをしたい」との純粋な思いで生産し続けていますが、生活のための「なりわい」として農業を成り立たせるために所得向上への手立てを考えることも必要不可欠です。

一方で、命ある農産物をわが子のように一生懸命に育てているのも農家なのです。強い思いを持った農家をわれわれがどのようにサポートしていくのか、原点に立ち返って考えていかなければなりません。

最後になりますが、合併して規模は大きくなりましたが、JAの事業・運営の目的は、これまでと変わることなく、組合員・利用者の皆様から「おおきに」「ありがとう」という言葉をいただくことに尽きると考えております。

今後も実り豊かな未来を創造し、地域農業を守り続けるため、役職員が一丸となって目指す姿の実現に向け取り組みを進めて参りますので、なお一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



『国消国産』運動をPRする坂東会長

